

辰野  
隆

長谷川  
如是閑



長谷川如是閑



## 如是閑の印象

昨秋の一夜、星ヶ岡茶寮で文藝春秋社の主催にかかる読書趣味座談会の席上、僕は初めて長谷川如是閑氏に会ったのであった。あたか恰も食卓を挟んで氏の真向いに席を占めたので、僕は氏の面長おもながと言うよりも、もう少し長い顔を親しく眺め、柔か味のあるテノオルの余音をのこすバリトンで、静かに語る声を聴くことが出来た。如是閑

とは斯の如き仁でもあろうかと、かねて逞たくましくしていた想像と目のあたり瞥みた現実とがぴったり一致したのは、僕にとっては正に一つの悦びであった。氏に会う以前、僕は既に新聞や雑誌の写真で度々氏の風豊に接してはいたが、どれもこれも僕の考えていた氏の床しさを体していなかったもので、どれもこれも写真ではなくして写偽に相違ないと自分で極めていた。然るに一度氏に接して写偽が一掃され、僕の久しく愛撫していた心象が印象と等しくなったのであった。

親しく如是閑氏の顔を眺め、その声を聴いたのは最近の偶然に属するが、僕が如是閑氏の著作を読み始めてから久しいものである。二十五六年にもなるだろうか。露伴、鷗外、漱石の全著作と相俟あいまって、如是閑氏のものなら、創作、論評は言うに及ばず、紀行、随筆の端に至るまで殆どことごと悉く読んで、昔も今も、常に教えらるるところが多い、僕にとっては忘れてならぬ知的先輩なのである。

たしか明治四十三年頃であつたらう。当時僕は帝大法科の学生だったが、毎年、夏になると、伊豆の戸田に開かれる帝大水泳部で数旬の休暇を泳いで暮すのが僕の年

中行事でもあり、無上の悦楽でもあった。その年も、例によつて厭やで堪らぬ法科の試験が済むと、法律のノオトで汚れ腐つた頭の襞ひだを洗濯するつもりで、真夏の光りに充ちた戸田に出掛けたが、戸田で初めて、俳人荻原井泉水氏と知つたのであった。或夕、井泉水氏と二人で、駿河湾を見晴らす石崖の上に腰をかけて、常に美しい富士の夕焼を賞しながら文学を談じていた。今でもはつきり覚えているが、その時、沖に点々と輝き始めた漁火いさりびを眺めるともなく眺めていた井泉水氏が、思い出したように、これは旧作だが、と断わつて、「近う来れば灯に隣



る灯や打つ砧」はどうだろう、と言った。僕は言下に秀逸だと答えた。話は俳句から小説にも及んでいって、尽くる所を知らなかったが、井泉水氏はやがて、君は長谷川如是閑の小説を読んだ事があるか、と僕に訊ねた。若し未だ読まなければ、近作の『額の男』を是非読んで見給え。如是閑という人は極めて特色のある、知的な作家だと教えて呉れたのみならず、単行本としては『額の男』一卷だが、古い「日本及日本人」には既に幾つかの短篇小説やアフオリスムのようなものも発表しているという事まで知らせて呉れた。

その年の秋、僕は初めて『額の男』を読んだのであった。而してこの小説の主人公羽仁正雄を如是閑その人と自分で勝手に極め込んで、窃ひそかに敬慕の念を禁じ得なかつた。此の小説の中に今も忘れ得ぬ一節がある。それは、法律を学ぶ愚を悟って、理科に転学しようとしている伴ばん進すすむという風変りな秀才と、同級の羽仁正雄とが没趣味な法学をこきおろす件りである。

「二人の話は法学のつまらないといふ事から始まつた。

羽仁君は案外つまらない、といふ。伴君は案の条つまらない、といふ。伴君は今日学校で、権利は主格なくして存在するや否やといふ件をイエリングが何うの、ウインドシャイドが斯うのと二時間も饒舌しゃべつた教師を、気の毒なものだと云つて、宏大な宇宙に在つては、現に我等の目に触れて居るものだけでも説明し尽す迄には、何千万年かかるか解らないのに、有りもせぬものまで説明しようとしてゐる。巢鴨病院に行つた時、友達の医学士が、庭に遊んでいた一塊の患者を見せて、これだけの患者を一々研究すると中々骨が折れると云

つて居ると、其のうちに、医師で精神病になつた奴があつて、塀に向つて居りもせぬ奴を頻りと診察して居た。法学者は其の患者見たようなものだ、と笑つた。羽仁君は夫れを少し僻見だと思つて、

——法律学の対象は矢張り現実の社会現象なのだから、無いものの説明とは違ふ。

——さうです、芋は、作る奴もあり、煮る奴もあり、喰ふ奴もある。芋を作るのでも、煮るのでも、喰ふのでもなく、ただ転がして居るのが法律学者だ。芋は無いものぢやあるまいが、と伴君は嘯いた。

——すると哲学者なども芋を転がして居る連中ですか。

——哲学者は芋を分析して居るのです。ただ分析は科学の力を藉りなきやならぬのに、科学が進まぬ時代に、ただ肉眼や舌の先で分析してゐるのだから、辛いとか甘いとか固いとか柔かいとかいふ水掛論に終つたのです。昔の人間は真理に達するには考へるより外に仕事が無かつたが、今では考へるよりも見る方の仕事が多くなつた、見る方が肝要になつたのです。まだまだ人間は見る時代です、考へる時代は未だ容易には来

まい。

——然し獣の目も見る、人間の目も見る、人間がただ獣のやうに見るのみでは仕方がない、と羽仁君は故障を入れた。

——さうです、哲学者は見ないで考へたがるのです、科学者は獣のやうに見て居るのです。さういふ哲学者や科学者は思想の進歩に与かる事は出来ません。ヘッケルも云つて居つたですな、現代科学の成果は、例へば細胞説にしる、進化論にしる、寧ろ哲学的成果であるが、而も夫れは単に瞑想から得られたのではなくし

て、広く深い実験の結果だと。要するに哲学者が観て、科学者が考へなければならぬ。法律学者などは下駄の齒入のやうな者だ。下駄を穿く者がある以上は必要に違ひない、従つて大いに齒入れを思索研究するのも好からう。僕は忌<sup>いや</sup>だ。」

「俺も忌だ」と、当年の自分も亦独<sup>また</sup>語した。

当時の僕は法科に学びながら、凡そあらゆる学問の中で、法律ほど下らぬものは無いとまで思つて居たのだか

ら、この一節は洵まことに一服の清涼剤であつた。少年時代に一度理科を志し亡父から屢々、将来田中館愛橘のような人格高潔な学者になれ、と言われていたことを思い出して、俺は専攻の方針を誤つたと思つた。勿論、今では法律というものを昔ほど軽蔑しては居ないのみならず、学としての法律はパスカルの所謂幾何学的精神エスプリ・ジオメトリックを涵養する頭脳の体操として、或種の親しみも興味も持たぬではない。兎に角、法律の研究には極めて強靱な、論理的な——パスカルの美意エスプリ・ド・フィネス識とは没交渉だが——頭脳が必要だとも思い、法律は研究に価する、なかなかがつ



ちりした学問だとも考えてはいる。

『額の男』を読んで、如是閑氏の理想主義イデアリスムと厭世観ペシミスムとの

極めて興味の深い交叉に異常な関心を持つようになった僕は、神田の古本屋の店を軒毎に漁って、如是閑叟の名の出ている古い「日本及日本人」を出来るだけ蒐めた。

集め得たものは、如是閑語、ロハ台の厭世観、十傑、殿様お目ざめ、にほひ、上げ汐だア、くつしたの穴、芋屋の娘、足のうら、ぺんどる君、など、大体今日の如是閑全集の第一巻に収められているものであるが、それだけを僕は特に切抜いて一冊に纏め、自ら閑叟集かんそうと題して愛

蔵し、書架にはなくてかなわぬ伴侶となつたのであつた。爾来、僕は法科を出て更に文科に入り、文科を出てから今に至るまで、二十何年一日の如く、我が如是閑氏の愛読者たる事に易りかわはない。将来も亦然しからざらんや。

如是閑氏はちやきちやきの江戸っ児である。先夜も僕は氏の二十二歳の時の短篇小説『ふたすぢ道』を読み直して、この感を深くした。僕は今ここで、『ふたすぢ道』の小説としての是非を論じようとは思わない。唯、此の頃の地方出の青年作家——中年、壮年作家でも大体同じ

だが——そういう人達の言葉と『ふたすぢ道』の作者の言葉とを想い比べて見て、東京で生れて東京で育てられた僕等がその何れに親しき都の響きを得たかは今更言うまでもない。『ふたすぢ道』の言葉は僕等の少年時代に、僕等の周囲で、学校で、街の中で、高座で、舞台上常に聴き慣れた伝統的な故郷の言葉であった。さては又一葉の『わかれ道』や『たけくらべ』の言葉でもあった。『額の男』の巻頭に寄せた三宅雪嶺翁の序文に曰く、

「閑叟は明治の生れで、而も初年の方ではないが、実

に生粋の江戸っ子である。深川で幅をきかした木場の次男、世が世ならば十八大通の随一と為り兼ねまじく思はれる。所が有為轉變で悟つたか、他に事情があつてか、商売する気はなく、道楽もせず、耽溺もせず至極まじめに新聞記者として立働いて居る。論文も雑録も翻訳も出来る、探訪も出来る、さうして小説も出来る。どれが一番の長所かは一寸判断に苦しむが、小説を以て一家を成すに何の困難もなからう。既に殆ど一家を成して居ると言つて差支へない」

この序文を読むと、僕は自分の一高から大学時代をまざまざと思い出す。三宅先生は赤坂新坂町の坂の下に住んで居られた。僕は坂の上に住んでいた。当時僕は日和下駄で散歩姿の翁を度々見受けた。僕が坂を下る時には翁は坂を上って来られた。翁が坂を下って来られる時には僕は坂を上って行った。童顔で血色がよく、いつも湯上りのような面持ではあったが垢抜けのした顔とは全く反対な、むくむくとして、もじやもじやとして、洵に温味のある風丰が、何となく西郷隆盛とは斯んな人ではなかったかと思わせるものがあった。三宅先生の円い顔と

如是閑氏の長い顔とが、今、僕の頭の裡で交々こもこも出没して  
いるのが、理由なしに愉快である。

生粹の江戸っ子で、年二十二、当年の新著月刊（明治二十九年）の懸賞を獲た小説『ふたすぢ道』、とこれだけ言つたばかりでも、既にその小説が紅露時代の影響の下に書かれ、趣味としては甚だ都会的な制作であつた事を想見し得るであろう。僕は作中のお熊婆々や吉公やお仙の言葉を聴きながら、僕等の少年期の東京の姿を想い浮べて、もはや歸らぬものを追うなつかしさを味わつた

事である。

然しながら、更に踏込んで、一步『ふたすぢ道』の内容に立入ると、江戸趣味や都会情調は漸く影をひそめて、少年犯罪の一つの場合とも言い得る、一個のイデオロジイに読者はぶつかるのである。『ふたすぢ道』は趣味の豊かな都会の青年の筆に成ったものの、当時としては極めて罕<sup>まれ</sup>なコント・イデオロジイクであつた。露伴の仏教的乃至儒教的な観念小説とは自ら異なる、更に近代的な、欧羅巴的な興会に基く観念小説なのである。当年の如是閑氏は恐らく、二葉亭のロシアものや思軒や涙香のユウ

ゴオものさえ読んでいたと推し得らるるほど、此の短篇の内容はバタ臭い、それだけ時流を抜いたものであつた。

『ふたすぢ道』は如是閑氏の処女作と見做して差支えな  
いだろうが、氏はこの処女作に於いて既に一家を成して  
いる。之は正に稀有な場合の一つである。僕の知れる限  
り、処女作を以て既に一旗幟を樹て得た作家は、中年に  
して立った漱石を除いては、僅かに潤一郎、直哉、龍之  
介あるのみである。唯、潤、直、龍の三氏はどの角度か  
ら眺めても思想家型ではなかつたが、如是閑氏の根底に  
は哲学者が潜んでいた。若し氏にして木場の次男として



長く不自由のない生活を享樂し得たなら、粹者通人とならざる限りは、恐らく大学の教壇に於いて哲学とか社会学に新しい機軸を拓く良師となつたかも知れぬのである。氏が折紙つきの官僚嫌いであるにも拘らず、その創作にも評論にも、常に高踏的なアカデミスムの影の形に添う如きを見逃せない。氏は自らジュウルナリストと呼んでゐる。が然し、先日も氏を中野の家を訪ねて、一時間ばかり、親しく氏の風姿や言辞に接する事を得たが、氏の人柄やその書齋や書架の隅々にまで沁み込んだ香気は、所謂ジュウルナリストから発する臭気とは凡そ似て

もつかぬ薫りであつた。僕には、何となく、氏が停年には達したが、なお講師として名講義の続行を熱望されるプロフェツサアのようにも思われた。若しジュウルナリズムがアクチュアリテの批判に在るなら、如是閑氏は確かにジュウルナリストであるだろう。然しながら、日本のジュウルナリズムが真にアクチュアリテの批判であつた例が明治以来そもそも幾度あつたらう。国家社会の重大時期に限つて、ジュウルナリズムは天職の批判を抛棄したとしか僕には思えない。我が邦には、厳正にして且つ包容力の広い、真の自由主義を死守して、デバア紙に

立籠もったベルタン兄弟の如き頼もしい記者は只一人も見出し得ぬのみならず、ベルタン兄弟を支持した読者層をも亦見出す事が出来ないのである。十年前、リヨン大学の美術史講義に於いてフォツシイヨン教授がアングル描くところの『ベルタン兄』エエネの肖像を指し示しつつ、

『勇敢なる市民』ブルジョワ・クラジユウと叫んだ光景が沁々と思ひ出される。

思想が、敢えて大衆とまではいかずとも、中学卒業程度の市民の生活に沁み込まぬ社会に於いては、ジュウルナリスムの確立は覚束ない。如是閑氏が自らジュウルナリストと信じながら畢竟市に隠るる淋しきプロフェツサア

たらんとする現状が之を立証している。処士横議の時代の後には、良師も亦口を箝せられざるを得ぬのか。

『ふたすぢ道』から発足した如是閑氏の作家としての歩みが『殿様お目ざめ』や『上げ汐だア』に至っては愈々イデオロジック小説の面目を發揮して来た。而もそれが『額の男』に及んで全くロマン・イデオロジックの定型を得たのである。

『額の男』は徹頭徹尾オピニオンで読ませる小説であるとは、既にこの小説の現われた当時に漱石が批評した言

葉であつた。この小説には筋らしい筋が無い。額の男、即ち考える男羽仁正雄の客間や書齋に集まつて来る何れも一癖ある男女のオピニオンの渦の中で主人公羽仁君の広い額が漸く暗くなり、その厭世的な思想が段々濃くなつてゆく、甚だ論議的な小説である。此の小説は文壇の月旦げったんには乗らなかつた。由来日本の文壇はロマン・イデオロジックに対しては頗る冷ややかであつた。要するに小説は小説で、哲学でも道德でも宗教でもない即ち小説はイデオロジイではないと極めつけられていた。更に進んで、小説は小説でもないと誰かが言いそうなものだが、

流石にそこまでは誰も言わなかつた。然し兎に角小説からイデオロジイを除いて評価するのが職業的な、くろろうと的なる見方でもあつたが、それは、飛んでもない誤りである。苟いやくも近代の盛名ある小説は、ルウソオの『エミイル』以来バルザックの『人間劇』、スタンダールの『赤と黒』、ドストイエフスキイの『罪と罰』、トルストイの『戦争と平和』、フロオベエルの『ブヴァアルとペキユシエ』を初めとして、殆どロマン・イデオロジックで無いものはない。近代に於いては、第一流の小説家たるには必然的に傑れたイデオロオグでなければならなかつ

た。特に仏蘭西だけを顧みても、ロマン・ロランは如何、ジイドは如何、プルウストは如何。アナトオル・フランスもポオル・ブルジェもモリス・バレスもことごと悉く卓然たるイデオログである。極めて器宇の狭いジュウル・ルナアルと雖も穩健質実なソシアリストであつた。もし我が邦の小説読者層が欧羅巴並みに思想的であつたなら、如是閑氏も亦露伴、鷗外、漱石以後のロマン・イデオロジックの大道を悠々と闊歩し得たであらう。然るに時勢は小説が漸く思想的になり社会的になろうとした時に、鋭角的な国家意識が各国に對峙して競うようになつた為

に、惜しい哉一時頓挫せざるを得なくなつた。

考えて見ると、我が邦の感情史は二千年來の伝統を有しているにも拘らず、思想史は近々五十年來の薄化粧にすぎない。一風呂浴びれば消え失せる白粉おしろいにすぎない。明治中期までの民権も自由も竟ついにに思想とはなり得なかつた旗じるしの単語であつた。現代政治家の目もあてられぬ思想の貧困が遺憾なくそれを証明している。明治の中葉から大正にかけて、ソシアリズムやアナキズムが単語の域を脱して漸く句の域に進んだ。而して昭和期に至つてマルキシズムやコンミュニズムが句の域を脱してパ



ンフレットの的な宣言や構えにはなつたが系統システムある日本的  
 思想に結成せらるる前に、内外の事情によつて根こそぎ  
 に刈られる運命に際会した。弾圧の奏功や転向の早業を  
 冷笑するのは他人に任せよう。真面目な学徒自ら省みて  
 思想の根蒂こんたいの狭く且つ浅かつた事を歎くばかりである。

斯る国家的社会的変遷の間に立って、独り如是閑氏の  
 『現代国家批判』と『現代社会批判』とが僅かに時代の  
 モニュマンとして遺るものではなからうか。嘗て帝大法  
 科の教室に於いて、僕は公法私法に関して幾多のスペシ  
 ヤリストの講義を聴いたが、如是閑氏の此の二巻に比肩

し得るものは無かった。彼等の専門的な造詣には相当な敬意を払わぬではなかった。然し彼等の国家社会に対する批判に至ってはドイツ的国家社会観の模倣か、さもなくば、莊重な文章で糊塗ことした翻訳的焼直しにすぎなかつた。素々もともと思想を重ぜぬ、従つて思想の犠牲者を一人も出さなかつた官立大学の法文科から思想的批評家の輩出しなかつたのは偶然ではない。帝大法学部や経済学部に思想的曙光しよこうのさし初めたのは近々十数年この方の事であるのに、今やその光りもうすれ行こうとしている。長い前途を照らす健全自由な思想さえ国歩の指針となり得そう

もない事を考えると、耿々たる好學の徒も腕を拱こまぬいて、  
岐路に佇たたずむ他はなからう。

如是閑氏の二卷の『現代国家並に社会批判』に就いて  
は他に適任な批評家も多い事であろうから、僕の呶々どどを  
要しない。ここには個人主義的なイデオログたる額の  
男が一面には、国家、社会の有力な傑出せる批判者でも  
あつた事を読者に伝えれば足るのである。唯、二十幾年  
来、僕の目に映れる如是閑氏が評論に於いては唯物的な  
社会学者ソシオログであるにも拘らず、創作に於いては唯心的な

理想主義者たる事である。此の点に就いて英国風な思想イデアリスト家と思われている如是閑氏が却て仏蘭西的なデイドロヤオオギユスト・コントやテエヌヤルナンやアナトオル・フランスなどの流れに近づいているようにも思われるのである。而して氏の唯心的な理想主義は単に初期の『上げ汐だア』や『額の男』や『ぺんどる君』に於いてのみ言い得る事ではない。それ以後の小説に於いても亦言い得るところである。『虎使ひ志願』、『一人の飴屋』、『老人形師と彼の妻』に於いても、登場人物の悉くが額の男や、ぺんどる君や、隅田川の上潮を眺める外に能のない

男の兄弟姉妹である。要するに、如是閑氏の描き出した  
 主要な人物は殆ど悉くペシミストであつた。加之、無知  
 であるべき労働者やカフェエの女給といへど雖も驚くべきイ  
 ンテリゲンチヤであつた。そこに如是閑にも漱石にも共  
 通する都会人の智的趣味的潔癖とも名づけ度いかたくな頑かたくなさが  
 感じられる。全く、漱石と如是閑とは多くの相似を持つ  
 ている。弁証的な頭脳に於いて、学者的なサンチマンタ  
 リスムに於いて、而して又、一種のヒステリイとも診断  
 し得る神経に於いてである。殊にこの最後の類似点は漱  
 石、如是閑の制作を丹念に打診した読者のみが感じ得ら

るるところであろう。惟おもうに、此の二人の作家には単に江戸っ児という地理的、歴史的なオモジエネイテが存するのみならず、生理的、病理的なオモジエネイテすらあるのではなからうか。『虞美人草』と『額の男』とを讀み較べて、這般しやはんの消息を窺えぬであらうか。

漱石の『額の男』批評の中に注目すべき一節がある。

曰く「……『額の男』の興味は、全く、此連続した一調子オピニオン變つた意見オピニオンから出る刺激だと云はなければならぬ。余は此の連続不断の意見オピニオンを逐一に讀みながら、深く如

是閑君の才氣の煥發縦横なるに感服した一人である。他の作家をして片言隻句せきくすら容易に纏めしむる余裕を与へぬ先に如是閑君は滔々として常人の思ひも寄らぬ事を五頁でも六頁でも繋げて行く、実に驚くべき才力である。然し一言如是閑君に忠告したい。あの意オピニオン見は、世の中を傍観する、頭腦的な遊芸に似た所がある。キツトは無論あり余る程あるが、惜しいかな真正の意味に於いての真理、摯実なる観察としての概括とはどうも受けとり悪にくい。いくら社会上人事上重大な問題に亘つても、派手で華奢な感が先へ立つてならない。……『額の男』はあま

りにその色彩で蹂躪されてゐる。……余も、批評もやるが創作もやる。此『額の男』の批評中で移して余自身の小説の上に持つて来て非難しても構はないものもあるかも知れない。如是閑君も其辺は御容赦あつて、一体お前の小説は何うだななどと遣り込められざらん事を希望する。」

現に、漱石全集第十四巻に収められている此の批評を僕は二昔以前に、麻布の南葵文庫で、古い「日本及日本人」を借り出して読んだ記憶がある。当時、僕は漱石が如是閑を批評しながら自らの長と短とをも批評しているものと見倣してこの一文を面白く読んだのであつた。



然るに、此こゝに、如是閑文芸全集第五卷、『初めて逢つた漱石』という文中に、更に注目に価する一節がある。

「……つまり、江戸ツ児には、理智的立場の相違を直ぐに趣味的立場の相違と断じてしまつて、ムツとするやうな氣になる癖がある。夫れは殊に趣味性が発達してゐるので、人が理智から来た判断を以てやつて来ても、直ちにそれを劣位の趣味性から来た判断と思つて、済度すべからずと諦めてしまふのだ。夏目君にも夫れがある、が君はなかなか諦めない。さうケナシつけて

置いてから夫れを理智の方面から屈服させようとする。さう云ふ事からひいて、君は感情又は感覺の問題を、論理の問題にすることが珍らしくなかつた。誰かも話してゐたやうに、下読みをして来ない生徒に、『先生でさへ下読みをして来るのに生徒の分際で』と小言を云つたといふが、これは下読みをして来ない生徒に對する先生の腹立を表現するのに、外の先生のするやうに其のまま『不埒』とか『横着』とか結論だけで叱り付けしないで、三段論法に作つて見せたのである。即ち、

出来ない生徒ほど下読みの必要がある

生徒は先生より出来ない（故に）

生徒は先生より下読みの必要がある

夏目君の会話や演説には始終斯ういふ論理的構造をもつたものが挿まれた。夫れは、若し君に機智と滑稽味とがなかつたら余程困つたものになつたに相違ないが、君は其の論理の機関を機智と滑稽とで運転してゐたから、夫れを喰はされた者も毫も停滞の感じを起さないで、寧ろ一種の快感を覚える。此の点も江戸趣味の特徴が現はれたものといへる。江戸ツ児は、憤怒や

悲哀の発現にも、往々機智を交へたり滑稽を加へたりする。夫れが為めに、江戸ツ児の憤怒や悲哀は、地方の人には間々まま不真面目に見られる。此の点に於いて、江戸ツ児には愛アイルランド蘭人にそつくりなところがある。」

斯く評して、如是閑氏は更に漱石の反抗心と江戸の町人の封建的階級制度に対する反抗心とを比較して言うのに、

「……大学教授を嫌つたり、博士号を馬鹿にしたりす

るのは、君ほど偉大なる力を持つた人には何の必要もない反抗であるのに、君は何等の力のない人のすると同じ反抗方法を取つて居たのである。……『懐手をして世間を狭く活らし度い』といふ君の我儘は、私達の心の底に沈んでゐる政治上芸術上の反抗心と共通の血液の凝結から出来てゐるのである。であるから、其の反抗心を『小さい』といふのは、月並の常識に従つた言草なのだ。メレヂスの機智や、シヨオの皮肉も、此の反抗心を十分に表現するには足りないほど大きいものだと私は思つている。夏目君だつて無論十分だつた

とはいへない。」

これも亦如是閑が漱石を批判しつつ、自らを裁いている言葉と解かれぬだろうか。

たしか、室伏高信氏だったと思うが、現代日本の最も聡明な男は若槻礼次郎と長谷川如是閑だと言った事がある。僕は現代日本の政治家には悉く絶望しているから、若槻氏の聡明が挙げて栄達と保身の具に供せられても、それは俗流政治家の常套じょうととして一顧だに払う気にはな

れぬが、如是閑の聡明は漱石の聡明と等しく、寧ろ名利に背いて、真理を求むる尊さを蔵するが故に却って三顧にも三省にも価するのである。

若し日本語が、国際語として英独仏語の如くならずとも、せめて、露伊西語程度の流通力を有っていたら、如是閑氏や吉村冬彦氏の如きは一流のエッセイストとして既に世界人となっているだろう。而も両氏とも、先輩たる漱石に似て、「懐手をして世間を狭く活らし度い」偉大さと云わんよりは寧ろ純日本的に深味のある雅懐を有して、その<sup>たのしみ</sup>樂を改めない。有り難い事である。

如是閑氏の小説には影の如くつき纏う二種の女性がある。それは理智と情操とを兼ね備えた若き佳人と、忠節温良な老婆とである。この二通りの女性は同時に現われる事もあり、単独に現われる事もある。『上げ汐だア』にも『くつしたの穴』にも『足のうら』にも『額の男』にも『老人形師と彼の妻』にも『或るカフエーの娘』などにも出没する。如是閑氏の真に愛惜する女性はこの二人以外には無いのかも知れない。而もそれが実在の女性であるか、或は又氏の脳漿で理想化された架空の存在で



あるかは容易に判定し難いが、この二種の女性が往々にして氏の創作のアンスピラトリスであるのが、特に僕等には親しみを覚えさせる。斯の如き女性は最も清澄なるブルジョワ的なミュウズであるからである。果然、如是閑氏も亦余裕あるブルジョワの子であつた。

昨冬、僕は斎藤茂吉博士から近業『柿本人麿』を贈られ、異常な興味を以て、この名著を讀了した。博士は『赤光』以来、『童馬漫筆』以来、僕の和歌に対する蒙を啓いた先輩である。『柿本人麿』巻尾

に収められた「長谷川如是閑氏の人麿論を読む」という一文は歌学者として且つ和歌の鑑賞家としての博士を愈々頼もしき人、懐しき人と思わせるにも拘らず、如是閑氏に対する博士の駁撃の激しさには或は如是閑氏を単に思索の綱渡りを事とする才人に過ぎるが如くに思えば思われる筆致がほの見えた。博士の人麿論に全く同感しながら、且つ如是閑氏の人麿論に早急にすぐる概括を認めながらも、僕は断じて、如是閑氏を単に才人としては永年眺めて居らず、学徳衆に抜ずる文学者として、現代には稀れなアン

シクロペディスト的存在として深い敬慕の念を寄せ  
て居るが故に、この拙文を草したのである。

(昭和十年冬)

## 如是閑全集

露伴・鷗外・漱石。この三大家は、親しく警咳けいがいに接し  
て、その門下となるの悦びは得られなかつたが、青春期  
から今日にいたるまで、絶えず僕の——勿論取るにも足

らぬ知能ではあるが——全知能の形成を助けた、というよりも寧ろ、僕の全精神生活を造った、永く忘れてはならぬ三文豪である。

而して更に一人、之亦未だ見ぬ先輩として、且つ現代日本に於ける最高の書齋人として、加之我等の唯一の百科学者的イデオログとして、深き敬慕の念を禁じ得ぬ達人に、如是閑がある。

此度、氏の文芸全集出版が企てらるると聞いて、僕はそぞろに懐旧の念の湧き来たるのを覚えた。二十幾年振りで、嘗て愛読措く能わなかった『上げ汐だア』や『ぺん

どる君』を再<sup>ま</sup>た読みなおして、昔の悦樂を新たにし得る事であろう。当年の如是閑は絶望せる理想家であつた。当時僕は『額の男』を読んで、主人公羽仁君即如是閑と勝手に極めて、此の？（疑問符）の男を窃かに愛して愉んでいた。今の如是閑は、寧ろ、昔の羽仁君を嗤っているだろう。恰も、押しも押されもせぬ百科学者となつた唯物論者デイドロオが漠然たる唯心論者であつた昔を嗤うが如くに……

然しながら、二昔前の『額の男』は、如何に進化しても、依然として、如是閑の裡に『額の男』即考える男と

して残っている。何故なら、『額の男』は羽仁君ばかりではない。『ぺんどる君』も隅田川の「上げ汐」をぼんやり眺める他に何もする事のなかつた男も亦要するに『額の男』であつたからである。そう思つて氏の小説の記憶を辿ると、周期的というか、間歇的というか、今もなお『額の男』が出没している。而もその額の烙印は、濃淡の差こそあれ、畢竟聡明な思索家・観察者には免れ難きペシニスムである。惟うに、ペシニスムは唯心論の彼岸に沿うてさまよつても、唯物論の此岸に沿うて散策しても、所詮寂寞たる姿であろう。

小説『額の男』上木の直後、漱石が「日本及日本人」に読後感を寄せて、徹頭徹尾オピニオンで読ませる此の小説は異例であると評した、此の評語を二十幾年後の今日新たに思い出して、僕は、同じく徹頭徹尾オピニオンで読ませるデイドロオの小説『ラモオの甥』に遠く想いを馳せたことである。

(昭和八年初夏)





日本文学電子図書館

---

長谷川如是閑

著 者：辰野 隆

制作者：宮澤一郎

底 本：「忘れ得ぬ人々と谷崎潤一郎」

中公文庫、中央公論新社

2015年2月25日 初版発行

日本文学電子図書館